

---

# 手

暮音孤

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】 手

### 【Nコード】

N 8 2 5 1 P

### 【作者名】

暮音孤

### 【あらすじ】

祖母の十三回忌に合わせて田舎を訪れた青年は、歳が七つの頃に神隠しに遭っていた。

作中に、宮崎県民謡「刈り切り干し唄」を変更したものを記載しています。

「水桶にな、見ん覚えのねえ手が映つちよつたら、決してそんな  
目を離しちゃういけんよ」

成人してからも、童には祖母の言葉をふと思い出す時がある。

いつも縁側に腰を下ろしていた祖母。何かを見逃すまいとするよ  
うに景色に目を向ける祖母。幼少を田舎で送った童が見てきた祖母  
の姿は、年齢を重ねた以上にどこか浮き世離れしていた。そんな  
祖母から聞いた言葉なのだが、どういう流れで耳にしたのかまでは  
覚えていない。

そして、一度思い出した言葉は気にしないではいられない。とく  
に都会に住まいを移し、鏡と関わらない日がないとなると、なおの  
ことである。

童は無意識に虚像を追ひ、その足元を注視する。それだけだ。

しかし、誰と行動していても、それは何も変わらずに祖母の言葉  
に従っていた。

田舎では昔からの習俗を今も伝えており、たびたび神隠しに遭う  
人がいては村総出で鳴り物を叩きながら捜してきた。見つかること  
も見つからないこともあったという。

そんな田舎は数戸の家屋が点々とする、山に挟まれた入り合いの  
小さな村。秋は紅く黄色く山を化粧し、黄金色に輝く稲穂は太陽の  
沈む折に至上の世界を覗かせる。

その時間、異世界との境界を曖昧にすることを教わったのも祖母  
の話からだ。

しかし、祖母の話自体が嘘とも真ともつかない曖昧さを伴い、夢  
も現も等しく影を伸ばしていたことに気が付いたのは、日がな一日  
中、縁側に座り、じいっと外を眺める祖母の姿を目の当たりにして

からだ。

祖母の法事も十三回忌を迎え、親に連れられて帰省していた童も一人で訪れるようになっていた。

当時からそのままの姿を残す畦道を歩いて、祖母の暮らした家に向かう。車も通ることの出来ない細い道を、一人で歩く。

神の居る地に続くと言われる道は、昔から決まった時間しか歩かなかった。格別に心の躍る頃合いには、決まって祖母の言葉を思い出して足を向けなかった。いや、向けられなかった。

「雨ん上がりの、稲穂の頭から雫が垂れんって時はあな、いけんよー」

とくに、神隠しに遭うと言われる黄昏時。童はツンツンと収穫の時を待つばかりの穂に触れながら、昔に遭遇したことを思い出した。

……

まだ、あれは七才の頃　黄金色に輝く稲穂を手にして、同じように雨上がりの畦道を歩いていて。道のあちこちにできた水溜まりを踏んで回る。稲穂だけを水面に映し、ギヤマンを踏む要領ではち撥ねさせる。

瞬きをする僅かな間だけ、飛び散る水玉に黄金色が残し、それが綺麗だった。夕陽に照らされるだけでも言葉をなくしてしまうが、それ以上のものがあつた。

それがある時、水溜まりに穂先を差し出そうとすると、風が吹いて淵をはみ出してしまった。何度も何度も繰り返すが、やはり風が吹く。いよいよ熱くなって実をたと詰めた穂殻を掴んで水溜まりに映したのだが。視界の端で白く映える物がよぎった。

今度は好奇心から、それを追っていた。水面ぎりぎりに腰を屈み、隅々まで目をやった。そして、見たのだ。その端を渡る白いもの。白い手を。雪のように白い手が水面に映っていた。驚いて後ろを

振り返るも、誰もいない。あまりに不思議で、じっと見てみると、水面の穂を掴んで引つ張ってきた。

ぐいぐい、ぐいぐいと引つ張った。

「いやだ、いやだ。これは僕の稲穂だい」

ぐいぐい、ぐいぐいと引つ張られ、稲穂はそよぐ。

この時、白い手は風の手なのだ、と幼いながらに考えた。

その綱引きは唐突に終わりを迎えた。

穂から一粒の実が水溜まりに落ちるや、水面を波紋が走り、揺らぎと共に白い手はかき消え、再び元の静寂を取り戻したのだ。

辺りを見渡せば黄昏も過ぎていた。ぬかるむ畦道を急ぎ帰り、祖母にその出来事を話すと……。

「良かった。良かった。お前さは強い子じゃねえ」

祖母は話しも聞こうとしない親とは違い、誉めてくれた。

「そんは山の神だあ。お前さがきんきらに輝く稲穂をもつとったからな、羨ましくなったんだあ。山の神はどんと山に座っちよつてよ、村の祭りさ時に、今年とれた物をば捧げちよんだが、時たまちよいちよい山さを下りるんだあよ。もしも、お前さがひ弱な子でつたら、お前さごと神のとこさに行つとろうてなあ」

「神のところ、つてどこ？」

「神のいらす場所だあ。山の、こことは違う場所に住んどるんよ、神はなあ」

「水溜まりの向こう？」

「もつともつと、ひんろい所だあな。あと、水ん溜まりに屈み込んだつてえ、危ねかったなあ。かがみに覗き込んだらあな、連れてかれたでえね」

祖母はそう話してくれた後、民謡にも似た歌をくちずさんだ。

もはや 日暮れじゃ 迫々（さこさこ） かげるヨ／童よい  
ぬるぞ 隠せぬうちヨ

耳にしたことのある歌に、童もついて真似た。

こがね 重たし 実り揺れるヨ／秋もすんだよ 田の畦道くろみちをヨ

……  
「高い山から 握り飯こかしやヨ／天狗喜ぶ わしやひもじヨ」  
気が付けば、陽は西の地に沈みかけていた。道は見えなくなりかけており、やけに白く映える物が視界の端をかすめた。

驚くと同時に、怯える童に諭す祖母の姿を思い出し、水桶の話も思い出した。ちようと先の若干曲がった人差し指を童に立てる祖母は皺を深めて、怯える童を宥めようと目尻を下げていた。

「水桶はもののたとえでなあ、有り得ねえ物を見いたら、きいつけるお、言うことだあな」

その白いものはいつだかに見た手を彷彿させ、見覚えのない腕へと続いていた。

「何だあ、誰かいるのに手にしか気が付かなかっただけか。あんまりに白いからあ」と口に出す。内心は形容できない程に慌てていた。そして、手から目を反らしてしまった。その瞬間だった。

畦道が神の居る地へ続く道であるということも、祖母が縁側で待つことも失念するほどに慌て、しんと静まりかえる周りを気にする余裕も無かった。

目の前に顔を覆うように手が開かれ、童は目をしばたたくのみ。

その晩、童の隠れた事を知った村人は総出で捜した。組を作ってお互いを確認しながら、隠された童を捜した。それでも見つからないことも……。

水桶に覚えのない手が映ったら、決して目を離してはならない。

離れた途端、連れ込まれ、神に隠されてしまうからだ。

……三

……をヨ

……ひもじヨ

ここの山の めかしぞ すんだヨ／明日はたんぼで 稲刈るかヨ  
さきの山の めかしぞ すまぬヨ／稲の刈り入れ まだまだ先ヨ  
もはや 日暮れじゃ 迫々（さこさこ） かげるヨ／童よ いぬる  
ぞ 隠せぬうちヨ

こがね 重たし 実り揺れるヨ／秋もすんだよ 田の畦道をヨ  
屋根は萱ぶき 萱壁なれどヨ／昔ながらの 千木を置くヨ  
歌でやらかせ 草刈り稲刈りをヨ／仕事苦にすりゃ 日が長いヨ  
高い山から 握り飯こかしゃヨ／天狗喜ぶ わしゃひもじヨ

祖母のうたいは続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8251p/>

---

手

2011年1月3日20時03分発行